

さいがいぼらんていあせんたーせつちしゅみれーしょん
「災害ボランティアセンター設置シュミレーション」
さんか
に参加しました。

2014年2月2日、岸和田市の修斉小学校で行われた『災害ボランティアセンター設置・運営訓練』に『自立生活センター・いこら一』代表の東谷太とおおぞのたくろうが参加しました。小雨に煙る天候でしたが、幸いにも雨が上がり曇天の空模様の中、社会福祉協議会が『災害ボランティアセンター（以下「災害VC」に略）』の立ち上げに際し、参加者が各班（総務、ボランティア受付、ニーズ受付、マッチング、広報、資材・車両、救護）に分かれ、災害が起きた時の様々なニーズに対応するシュミレーションの訓練を行いました。

私たちは広報班に配属されました。広報班の活動として災害ボランティアセンター設置のお知らせのフライヤーを、時を同じくして行われていた修斉地区の災害避難訓練で集まった小学校の体育館に避難された方々に配布をしました。あくまでシュミレーションですので、実際の被災者としてのニーズが「災害VC」に上がってくることは無いので、災害時にはこのようなニーズがくるであろうという想定で「災害VC」本部に電話してみました。



【広報班ボランティアに従事する東谷】

まず東谷さんが「自宅に閉じ込められらので救助してほしい」との電話をしました。今回の訓練ではこのニーズに応えられるだ

けのボランティアが居なかったために救助訓練は出来ませんでした。続いて「車イス用のトイレでバッテリーが切れたので救助してほしい」との電話をしました。今回の訓練ではこのニーズに応えられるだけのボランティアが居なかったために救助訓練は出来ませんでした。続いて「車イス用のトイレでバッテリーが切れたので救助してほしい」との電話をしました。10分ほどしてから救護班のボランティアがトイレまで救助に来てくれました。続いて、「低血糖になったので避難場所の体育館まで物資を届けてほしい」との電話をしました。今回の訓練では満足な物資を準備していなかったためか、「飴」を3個と「お汗粉の粉」のバックを持ってきてくれました。

大菌はというと、小学校の近所にある農協に行き、「ボランティアですが、骨折してしまいました。救助をお願いします」という電話を「災害VC」にしました。救護班が到着すると「ボランティア保険は利用できますか？」という質問をする役でした。

ボランティアなのに大怪我を負い、救護班に救出して貰った上に、ボランティア保険が利用できるかどうかを質問する厚かましいボランティア役でした。災害時には被災者のみではなく、ボランティアも病気や怪我をするケースも考えられます。ボランティアは基本的には自己責任なのですが、命にかかわる問題においては救助や保険の対象に



【足を骨折したボランティアが運ばれる様子】

もなります。その場合に「災害VC」はどのような対応をしなければならないのかを考えさせられるケースでした。

広報班では5名ほどのボランティアがいましたが、それぞれが「広報」という役割を認識できず、話し合いの場をほとんど設ける事ができませんでした。その結果、それぞれが曖昧なままバラバラに活動をしたり、「広報」の役割を社協のスタッフに教えて貰うという災害緊急時には到底ありえない行動をとってしまいました。



【地域ニーズ受付】

どうしていくのか。子供や高齢者、妊婦さんや病気の方、そして障害者。声なき者のニーズを丁寧に聞きながらボランティアとしてどのような支援活動ができるのか。

「災害VC」やボランティアとして考えさせられる契機となりました。

今後もこのような地域の防災訓練に積極的に参加して行きたいと思います。

【文責：大菌】



【ボランティアの流れ説明】



←【ピラを配る様子】↓

